〈青森県史〉の窓 12

下北半島は周囲を海に囲まれ、内陸も平地が少なく山地が多いため、人々は長年海と山に依存した暮らしを営んできた。そんな中、日々の食料を得るために行われてきた農耕はどのようなものであったのだろうか。米を主食とする私たち日本人は、稲作の伝播以来、米を最上の作物とし、米作りを主体とする農耕を営んできたといっても過言ではない。北国の厳しい自然条件と対峙してきた下北の人々にとってはどうであったのか。

畑作の稗刈り（三戸郡旧南郷村）※参考
県史編さん民俗部会調査研究員　櫻庭俊美氏撮影

下北半島の稗田

清野耕司
（県民生活文化課県史編さんグループ）

下北半島において稲作が完全に軌道に乗るのは、意外にも昭和に入ってからとされている。しかし、下北に水田がなかったわけではない。人々は水田に稗を植えていたのである。笹澤魯羊は『下北半嶋史』の中で次のように述べている。

「半島の人々は明治の中頃まで稗を常食にした。稗田の収穫が終ると、やがて稗を精げる作業が始まったが、稗を蒸してこれを莚に拡げ乾して、翌日臼にて搗上げたものである。精げることを「きしね」と方言し、この作業をきしね搗といひ、未明から作業を始めて午後二時頃に終えた。（中略）大きな農家にては庭に臼を二つ又は三つ据えて、嫁や若い娘達によつて搗上げたが、杵の調子を揃へるためにきしね唄を歌つたものだ。」

「搗けつけ、けふもあすも搗け、あさつて粉糠の、餅搗きだ」

「十七ァ搗く杵ァ、八幡の山さ、わたしァ搗く杵ァ、庭さ響く」

下北の昔の田は全部稗田であったという。ウツギの花が満開になれば稗田にかかり、稗を畑に苗にして植え、稗田には岡苗を手のとどく限り植える。俗に「稗は転がしておいても、投げて（放って）おいても根がつく。」といわれ、米の場合のように丁寧ではなく、田型も使わずどんどん植える。田植えの後は、田の草とりというようなこともなく、秋まで放置しておく。稗はとにかく冷害に強く、農作業の手間も稲作に比べて格段に少なかったのである。

刈り入れは十月になってからで、風が吹くと実が落ちてしまうので、収穫時期に風が吹くと急いで刈り取りした。刈りとった稗は束ねて田にしま立てにしておき、全部刈りとってから、牛に駄付けして家へ運んだ。屋敷内にニオを組んでおき、脱穀するのは冬になってからであった。

青森県内では、このように田んぼに稗を植えたのは下北ばかりでなく、上北や三戸地方においても、水温の低い水口付近などには、稗を植えたものだという。畑に植える畑稗も含め、県内の東側一帯は稗作の卓越地帯であった時代があったものと思われる。